

『リボンの騎士』における「性別越境」の秘密

～ジェンダーを超えた人間存在とは？～

石 田 依 子

1. はじめに

手塚治虫による『リボンの騎士』は、日本の少女漫画の黎明期を代表する作品であり、その後の少女漫画の発展に大きな影響を与えた作品として広く認識されている。物語は、主人公サファイアが「男子の心」と「女子の心」を併せ持つという独特の設定を持ち、彼女が王国の後継者としての役割を果たす過程において男女二つの性別を往還する存在として描かれている。そのため、この作品は漫画研究のみならず、ジェンダー研究の分野でも避けて通ることのできない重要な作品であることは周知の事実である。物語中で、サファイアは「両性具有的」、あるいは「性別越境的」な存在に映り、時に男装し、時に女装することで、性別に縛られない行動が象徴されているように見え、『リボンの騎士』は現代のジェンダー論を展開するための題材として打ってつけの作品であると評価されてきた。本稿の目的は、物語を従来の視点とは異なる角度から再読し、サファイアは「両性具有」でもなければ「性別越境」する存在でもなく、あくまで一貫して「女性」として描かれたキャラクターであるという見地に立ち、『リボンの騎士』という物語に潜む「性別越境」に関する社会的および倫理的メッセージを解明することである¹。本作品がジェンダー研究の分野において極めて重要な作品であることはもちろんであるが、本稿ではこれまでの先行研究とは一線を画した視点を提供する。

『リボンの騎士』の初版は1953年から56年まで少女漫画雑誌『少女クラブ』に連載されたものであり、その後、主人公サファイアの冒険エピソードや登場人物の追記を経て、1963年から1966年に『なかよし』にも連載された。本稿では、前者を「少女クラブ版」、後者を「なかよし版」と称する。さらに、1967年から一年間、テレビアニメ『リボンの騎士』が放映され、同時期には手塚治虫と北野英明の連名で『週刊少女フレンド』にも同作品は連載されている。もっともこちらはSF仕立ての異色作品で知名度は低い。「少女クラブ版」「なかよし版」共に単行本化されているが、一般的に広く知られている『リボンの騎士』は後者のほうである。「少女クラブ版」に比べて登場人物の数が増えることで物語のスケールが拡大し、結果的に面白味も増している。それが要因となって、少女向けのエンターテインメント作品としての認知度が高まり、他バージョンよりも定番化

¹ 本稿は、手塚治虫の『リボンの騎士』をジェンダー論の視点から再解釈し、そこから読み取れる社会的メッセージを考察することを目的としている。したがって、当該作品をいわゆる「漫画史」や「漫画研究」の視点で論じることは目的としていない。

したと考えられる。当該作品がアニメ化された際も「なかよし版」が基盤になっており、『リボンの騎士』のメインバージョンとして広く認識されるようになっていった。

一般的に流布している版は「なかよし版」である一方、『リボンの騎士』を対象とした論考において、多くの先行研究が対象としているのは「少女クラブ版」である。その理由として挙げられることは、手塚治虫自身が言及しているように、「なかよし版」の『リボンの騎士』が「最初の少女漫画」としての地位を確立したこと（手塚、『リボンの騎士』[手塚治虫漫画全集 86・少女クラブ版]第2巻「あとがき」, 188）、基礎となる物語の主要な展開やキャラクター設定がこの版に基づいていることにより、原典的な価値が高いと見なされてきたのではないだろうか。しかし本稿では、いずれか一方の版に限定するのではなく、両版を横断的に参照しながら、『リボンの騎士』におけるサファイアのジェンダー表象がどのように描かれ、どのように解釈されるべきかに焦点を当て、分析を進めていく。

2. 先行研究の限界

先述したように、『リボンの騎士』には二つの版が存在する。「なかよし版」は登場人物も多く、息もつかせぬ冒険が次から次へと展開する一方、それらの冒険談に準拠してサファイアの内面的な葛藤も詳細に描かれている。他方、「少女クラブ版」は、物語の進行やキャラクター描写がシンプルで、語りのテンポも早く、「なかよし版」に比較すると、サファイアの内面的な葛藤はやや控えめであると言える。しかし、いずれの版も根幹となるストーリーは同じである。主人公サファイアが、天使チンクのいたずらで「男子の心」と「女子の心」を併せ持って生まれるという設定で物語が展開する。王国では男子しか王位を継ぐことができないため、サファイアは王子として育てられるが、彼女は女性としての自分を傍に追いやっているわけではない。そのような状況で、物語は彼女が王国の存続や恋愛、政治的陰謀といった様々な状況に直面しながら、女性としてのアイデンティティと王子としての義務の間で揺れ動く様子を描く。根幹となるあらすじにおいて、この物語の本質を提示する箇所は二点に尽きると思われる。すなわち、サファイアが生まれる以前に天上界で「男女二つの心を付与された」という設定、もう一つは、王位継承という下界の事情により、女子として生まれたサファイアが「男子」として育てられ、「王子」としての役割を果たさなければならないという設定である。この二つの筋立てゆえに、多くの先行研究が主人公サファイアを「両性具有的」および「性別越境的」な存在であると解釈してきたということは間違いない。確かに、表面的な設定だけを見れば、「男女の心」を持つ人間は両性具有に見えるし、「王女」と「王子」を往還する人物は「性別越境」しているようにも受け取られる。この解釈を基盤として、主要な先行研究において、『リボンの騎士』がどのように分析されてきたのかということを整理しておきたい。

初期の言及としては、1990年に仙台市で開催された第7回「女性フォーラム」で、「リボンの騎士の冒険～マンガを通して見る性差の揺らぎ」というタイトルのもとで行われた渡辺恒夫氏と藤本由香里氏の対談が挙げられる。このフォーラムは「リボンの騎士の冒険」と題されているものの、実際には「少年漫画」と「少女漫画」という分野における「ジェンダーと性の越境」について論じ

られており、『リボンの騎士』についての言及は一部に過ぎない。しかし、その一部の中で、渡辺は手塚治虫が少女漫画の「性別越境」という概念を提起した先駆者であるとし、『リボンの騎士』が「男装の少女」という表現を少女漫画に定着させたと指摘しており（仙台市市民局市民生活部婦人青少年課, 1-2）²、この指摘が後の研究者たちに大きな影響を与えた可能性は高い。また、藤本は後の研究において、手塚治虫が『リボンの騎士』執筆にあたって宝塚歌劇の影響を受けたことに準拠し、「少女マンガにその始まりからトランスジェンダーの刻印を押した」と指摘している（藤本, 178-180）。

次に、『リボンの騎士』研究において、「両性具有」や「性別越境」のモチーフについて、批判的な眼差しで論じた研究者について言及しておきたい。押山美知子は、論文と書籍において、サファイアを少女漫画における「男装の少女」の象徴的存在として位置づけている。押山論文は、サファイアの容姿や服装に込められた性別の表象記号に注目し、主人公が見た目に女性的な特徴（長いまつ毛、細い眉、華やかな装飾など）を持ちながらも、騎士の装いで男性として振る舞う点を取り上げる。押山は、この設定からサファイアの「性別越境」における複雑さを見いだしている。押山論文において注目すべきところは、サファイアが存在を単純に「性別越境」と捉えられるのではなく、それは「服装や行動などのきわめて表層的なレベルに終始し、＜内面化＞される段階までには至らなかったと捉え」、その原因をサファイアの顔の造形に求めている点である（押山, 27-36；押山, 『少女マンガジェンダー表象論』, 26）。大城房美は、サファイアが「ふたつのジェンダー役割を同時に演じている点で新しい」としながらも、「『リボンの騎士』はマンガにおけるありきたりの男性的観点にもとづいている」と指摘し、作品に描かれる「ヘテロセクシュアルの区分」に苦言を呈している（Ogi, 2001, 184）。また「性別越境」の両義的側面に注目した研究として、岩下朋世の存在は重要であろう。岩下論文は『リボンの騎士』に描かれた「性別越境」のテーマに焦点を当て、特にその両義性を分析し、この作品が「少女マンガ」の始まりとして高く評価されている一方で、ジェンダーの境界を超えるサファイアのキャラクターが、どのようにしてジェンダーの固定的なイメージを強化しつつ、それを逸脱するのかを考察している。岩下は、サファイアの「性別越境」はあくまで表面的なものであり、物語全体ではむしろジェンダーの役割が強化されていると分析する。特に、サファイアが「男子の心」と「女子の心」を持ちながら、彼女の行動や外見が典型的な「男らしさ」や「女らしさ」に分けて描かれていることが、ジェンダーの固定観念を強調していると論じる（岩下, 6-23；岩下, 『少女マンガの表現機構』, 87-94）。さらに、『リボンの騎士』の主人公を戦後社会における「戦う少女」として捉え、文化史的な視点からサファイアのジェンダー表象を分析したのは神戸啓太であるが、彼も岩下と同様、『リボンの騎士』がジェンダーの境界を超える物語

² フォーラムにおいて、渡辺恒夫は手塚治虫作『メトロポリス』に言及し、主人公ミッチーの喉のボタンで性別が変わる機能が、「両性具有的」と言及している。『メトロポリス』は1949年に発表されており、『リボンの騎士』よりも以前に書かれた作品であるが、これは「両性具有」をテーマにした作品ではないと言える。主人公のロボット、ミッチーのアイデンティティが「男性」と「女性」の間で揺れ動くわけではなく、物語の主題は「両性具有」や「ジェンダーの流動性」でもない。むしろロボットと人間の関係性や、人造人間の人間性・生命観がテーマであり、『メトロポリス』は『鉄腕アトム』に近いテーマと解釈するのが妥当であろう。

でありながら、実は性別二元論に基づく社会の強制力を反映している点を批判的に解釈している（神戸, 93-118）。

『リボンの騎士』のストーリーにおける二項対立的な要素の同時進行、つまり「男子の心」と「女子の心」、「王子」と「王女」という正反対の性質や役割を一人の人間が演じているという設定ゆえに、これまでの多くの先行研究が『リボンの騎士』を「両性具有」や「性別越境」とは切っても切れない作品として解釈してきたわけである。それらが肯定的であろうと批判的であろうと、まずは、サファイアが男女両方の心を保持しているという点で「両性具有的」、王子と王女の両方の役割を演じているという点では「性別越境的」と解釈されてきた。いずれの研究者も、『リボンの騎士』を根本的には「性の多様性」というテーマで分析しており、サファイアが両性的に見える設定や男装の役割が、従来の少女漫画にはなかったジェンダーの柔軟な表現を可能にしたと評価してきたのである。その背景として、作者の手塚治虫自身が宝塚歌劇に強い影響を受けていたことが挙げられる³（マッカーシー, 102）。宝塚では女性が男性役を演じる「男装の麗人」という文化があり、この文化がサファイアのキャラクターに反映されているという解釈が、両性具有的存在としてのサファイア像を強化したのであろう。また、1970年代以降、フェミニズム理論やジェンダー学が進展したことで、過去の文学作品や漫画作品を含む大衆文化に対して、ジェンダーの流動性やアイデンティティの多様性を見出す視点が一般的になった（大城他, 111）。こうした現代の視点から再評価する潮流の中で、『リボンの騎士』もジェンダーの柔軟さを象徴する先駆的な作品とされ、「両性具有」や「性別越境」の概念が込められていると解釈されるようになったことも挙げられる。

しかしながら、これまでの当該作品の研究の軌跡において、問題視すべき点が二つある。一つは、『リボンの騎士』が描かれた1950年代当時の日本社会には、現代のような「両性具有」や「性別越境」といった概念はほとんどなく、当時の手塚治虫が『リボンの騎士』でそのような概念を意図的に描いたとは考え難い。岩下朋世も指摘しているように、「性別越境」のモチーフが漫画の世界で一般的に流布し始めたのは1970年代以降のことである（岩下, 『少女マンガの表現機構』, 88）。現代の視点で解釈しすぎると、当時の作品が本来持っていた意図や構造が見失われてしまう危険性を孕んでいる。

もう一つの問題は、これこそが最も重要なポイントになるのであるが、『リボンの騎士』のストーリーを詳細に分析すると、主人公サファイアは本当に両性具有的、性別越境的な存在であるのかという疑問が生じるということである。本稿がこれまでの「両性具有」や「性別越境」という固定的な枠組みにとらわれた解釈とは異なる視点を提供し、『リボンの騎士』に対する新たなアプローチを提示することを目指すということはすでに述べたとおりであるが、それはこの二つの疑問点に依拠するところが大きい。

³ 手塚治虫自身、「女の子に人気の高い宝塚歌劇の舞台を漫画におきかえてみたらどうだろうと思ひ……」（手塚, 『リボンの騎士』[手塚治虫漫画全集 86・少女クラブ版] 第2巻「あとがき」, 188）と述べているように、『リボンの騎士』が宝塚歌劇へのオマージュ的作品ということは周知の事実である。サファイアのモデルは、当時人気が高かった男役の淡島千景であるとも言われている（マッカーシー, 102）。

3. 「両性具有」から「心理的両性具有」へ～サファイアのジェンダー表象

『リボンの騎士』の主人公サファイアのジェンダー表象を分析する前に、「両性具有」の概念について整理をしておきたい。

「両性具有 (androgyny)」という語句が活発に用いられるようになったのは、1970 年代のことである。この概念は、生物学や心理学、宗教学など多方面で言及されてきたが、特に社会学の観点からは、両性具有の概念は第二波フェミニズム運動の中で重要な役割を果たした⁴。当時、性別役割の見直しが進み、単に法的な男女平等だけでなく、文化や社会に根強く残るジェンダー・ステレオタイプへの批判が強まったことは周知の事実である。両性具有の概念は、伝統的な性別二元論を超え、特定のジェンダーに縛られないアイデンティティや特性を強調するため、フェミニストたちの注目を集めたのである。中でも、フェミニズムの視点からこの概念に注目し、男性的および女性的な特徴をバランスよく保つことが、心理的健康に寄与すると主張したのは、心理学者のサンドラ・ベム (Sandra Ruth Lipsitz Bem) であった。彼女が提唱したのは「心理的両性具有」であり、「男は男らしく、女は女らしく」といった考え方が否定され、性別にかかわらず、状況に応じて両者の役割をとりうるということが男女にとって望ましい在り方である、と主張された」(三井, 163)。そこでは、「男性性」と「女性性」の両方を併せ持つ存在が「両性具有的 (androgynous)」な存在であり、いずれか片方の性別の特性のみを表現するよりも望ましいということが指摘された。ベムはとりわけ社会心理学的視点から「アンドロジニー・スケール (Bem Sex-role Inventory)」を提唱し、個人の「両性具有度」の数値化を試みた。一方、同じ両性具有に注目しながらも、ユング派心理学の視点からアプローチしたのがジューン・シンガー (June Singer) である。彼女はユングの「アニマ・アニムス理論」に基づき、無意識に存在する異性の側面を受け入れることが、精神的な統合と成熟には不可欠だと主張した。ベムとシンガーを両性具有研究における双壁と呼ぶことは決して過言ではないだろう。

日本における両性具有研究の第一人者である河合隼雄は、シンガーの理論を日本文化に適した形で展開した。シンガーが両性具有を「個人の統合」として普遍的な価値として論じたのに対し、河合は日本の文化的背景を考慮し、日本人が無意識に持つ両性具有的特性に焦点を当てた。

しかしながら、1980 年代後半から、両性具有の考え方に対する批判が強まるようになる。両性

⁴ 「両性具有」と「半陰陽 (intersex)」とは明確に区別される。前者は、心理的または社会的に、男性的な特性と女性的な特性を併せ持つ状態やアイデンティティを指し、主にジェンダー表現の一形態として扱われ、あくまでも社会的・文化的な性別の概念に基づいたものであり、生物学的な性別と関係はない。一方、後者は、生物学的に性器や染色体が典型的な「男性」または「女性」に分類されない状態を指す。これは先天的な身体的特徴に関する医学的・生物学的な状態であり、ジェンダー・アイデンティティや社会的な性表現とは異なるものである。『リボンの騎士』において議論的となっているのは当然前者の方である。それは、藤本論文の次の指摘からも明らかである：「ここで手塚治虫が問題にしているのは、セックスではなくて、まごうことなくジェンダー、そして性自認だということは強調しておきたい。近年、性科学でも立証されている通り、性別は最終的には身体性や外見ではなく、その精神性(性自認)で決まるのである」(藤本, 179-180)。「手塚治虫が問題にしている」という箇所はひとまず傍へ追いやるとして、「セックスではなくて、まごうことなくジェンダー、そして性自認だということは強調しておきたい」という指摘は理にかなっている。

具有の概念とは、男性的特性（例えば、強さや独立性、等々）と女性的特性（例えば、従順であること、素直であること、等々）を融合させた理想的な個人像を描き出そうとしたものである。そこで問題となる点は、そもそも「男性性」と「女性性」が固定化され、そのステレオタイプが前提となっているのではないかということである。つまり両性具有が、「理想の個人」として描く人間像が、依然としてジェンダーに基づく特性の組み合わせであるため、ジェンダーの枠を完全に超えた自由なジェンダー表現ではないと指摘されるようになったのである。

以上のような「両性具有」の概念が含蓄する要素を踏まえ、『リボンの騎士』において主人公サファイアのジェンダーがどのように表象されているのかということを分析する。すでに述べたように、多くの先行研究において、彼女は両性具有の象徴と見なされてきたが、果たしてその解釈は妥当なのであろうか。サファイアが置かれた状況や社会的役割への圧力、また内面的な葛藤を考慮しながら、彼女のジェンダー表象の複雑さについて検討していきたい。

a. サファイアは両性具有的存在か？

既に述べたように、「両性具有」という概念は、生物学的な性というよりも、むしろ社会的・文化的なジェンダー役割を対象とした概念である。すなわち、両性具有的な存在というのは、「内面的に両性の特質を持つ」ことだけを意味するのではなく、「外的な行動や役割」の中で「男性性」と「女性性」を同時に表現することも含むことがある。サファイアの場合、「王子」としての振る舞いと同時に、「王女」としても行動することが要因となって、多くの先行研究において彼女の存在自体が両性の特質を併せ持つ存在として解釈されてきた。サファイアが外的に男性の役割を果たす一方で、内面的には女性としての自己認識を持っているという状況は、ある意味で「両性具有的な存在」と解釈する余地を与えてきたのであり、男性的行動と女性的アイデンティティの共存が両性具有的な側面を持つキャラクターとして評価されてきたのである。ただし、先行研究におけるこういった解釈は「外的な行動」に焦点を当て過ぎているきらいがある。サファイアの内面、すなわち彼女の心理状態が過小評価されてきたことは看過できないのではないかと。重要なことは、サファイアが見せる「男性としての役割」は、彼女自身の内面に保有されている自然な男性性から発生しているのではなく、王位継承や王国の安定のための社会的義務によるものであるという点である。サファイアの行動は彼女の内面を反映するものではなく、あくまで外的な圧力に応じた「振る舞い」に過ぎないのだ。

物語の全体像を把握するために、まず『リボンの騎士』のあらすじを紹介し、主人公サファイアのジェンダー表象がどのように描かれているかを分析するための基礎としたい。「少女クラブ版」では、サファイア国という王国が舞台となっている⁵。主人公サファイアは、天使チンクのいたずらにより「男子の心」と「女子の心」を持ってこの世に生まれてくる。出生後は王位継承のために「王子」として育てられるのである。やがて、サファイアが女性であることを知った悪役ジュラル

⁵ 『リボンの騎士』の初版である「少女クラブ版」では舞台になる国名は「サファイア国」とされ、主人公と恋に落ちるフ란ツ王子の国名は「シルバーランド国」とされている。しかし、後にリメイクされた「なかよし版」では主人公の国名が「シルバーランド国」、王子の国名は「ゴールドランド国」と改変されている。

ミン大公は、自らの息子プラスチックに王位を継がせようと策略を巡らせ、サファイアは「リボンの騎士」として逆臣たちと戦うことになる。その過程において、隣国の王子フランツと出会い、彼に恋心を抱くようになるのだ。最終的にサファイアは「女性」としての自己を取り戻し、フランツと結ばれる。一方、「なかよし版」では、「少女クラブ版」で設定されている基本のストーリーを踏襲しつつも登場人物が増え、物語がさらに複雑化している点が特徴である。たとえば、魔王メフィストが女性キャラクターのヘル夫人に変更されてサファイアの前に立ちはだかる。また、サファイアを支える海賊ブラッド（実はフランツ王子の実兄である）や女神ビーナスが新たに登場するほか、サファイアを男子と思い込み、結婚を迫る隣国の王女フリーベといったキャラクターが登場する。このように、登場人物が増えたことで、王位を巡る陰謀やサファイアの試練はさらに多層的に描かれ、物語は一層の広がりを見せている。しかしながら、両版ともに、『リボンの騎士』は、サファイアが政治的陰謀や愛の試練を乗り越えながら、自分の真の姿と向き合う成長を描いた作品であり、物語の根幹をなす設定は、サファイアに与えられた「男女の心」と、彼女が背負う王位継承の運命である。すでに述べたように、この設定ゆえに、彼女が両性具有的存在であると見なされてきたのだが、作中の描写を詳細に検討すると、サファイアが両性具有であるという解釈にはかなり無理があることが明らかになる。むしろ彼女は、完全に女性でありながら外的な圧力で男性のふりを強いられているキャラクターであると考えの方が適切である。以下、いくつかの場면을引用し、彼女のアイデンティティが一貫して女性であることを示す。

サファイアがこの世に生を受けた際、国民が待ち望んでいたのは「王女」というよりも「王子」であったと言い切っても良からう。それは、この国では男子しか王位継承できない上に、もしも男子が誕生しなければ、国王の従兄弟であるジェラルミン大公の息子プラスチック（極めて知能が低いという設定がされている）が国王になってしまい、事実上、国を乗っ取られるような形になってしまうからだ。このような社会的状況ゆえにサファイアは「王女」として生まれたにもかかわらず、「王子」として育てられることになる。こういった背景に加え、国王夫妻の側近の「王ズ」という紛らわしい発音が原因となって、生まれたのは「王子」であるというデマが国中に広まり、もはや国王は、実は生まれたのは「王女」であるとは言えない状況に追い込まれたというエピソードが物語中で語られている。一見したところ、単なる笑い話でしかないようなこのエピソードは、実は『リボンの騎士』という物語を解釈するにあたり、極めて重要な本質が隠されている。「王ズ」は「王子」ではなく「王女」であると、国王が一言説明すれば済む話である。それにもかかわらず、国王はなぜそれができないのか？男子しか王位継承できないという国家の法以上に、一般大衆が「王子」の誕生を熱望していることが、物語の舞台となる国家社会に根付いたジェンダー不平等を如実に示しているからである。

国家の事情により、「王子」として育てられることになったサファイアは、午前中の一時間だけ本来の性、すなわち女性として振る舞うことが許される。画像①はサファイアが生まれてから12年の歳月が流れたある日の状況を描いており、許されるという表現が適切であることを示す場面である。サファイアが王子としての立場と本来の性別の間で苦しむ様子が描かれている。この場面で、サファイアは時計の音に気づき、「もう九じだわ」と女性的な一人称で呟く。さらに、「王子に



画像①：『リボンの騎士』（完全復刻版・少女クラブ版）、第1巻20頁

もどらなくちゃならない」というセリフから、彼女が内面では「王女」としてのアイデンティティを持ちながらも、状況によって「王子」として振る舞うことを余儀なくされているという解釈が成り立つ。「にくらしい時計!」というセリフから、サファイアは自らの意志で男性性と女性性を融合しているのではなく、内面的には完全に女性でありながら、男性のふりをするを強制されている

のであり、彼女が「男性」と「女性」の間で引き裂かれるような葛藤を抱えていることは明らかである。



画像②：『リボンの騎士』（完全復刻版・少女クラブ版）、第1巻21頁

では、母親である王妃は、サファイアの姿をどのように受け止めているのだろうか。画像②において、王妃の悲痛な思いが表現されている。王妃は、「おお! わたしは気がくるいそう!」と嘆きながら、「かわいそうな姫」と苦しい胸の内を吐露しているが、ここで注目すべきは、王妃がサファイアを「姫」として認識している点である。妃自身もサファイアに「王子」としての役割を押し付けることが本来のあり方に反する不自然な状況であると理解していることがわかる。サファイアの最も近い存在である母親から見ても、サファイアは女性以外の何者でもないのである。「あくまにのろわれたのだわ」という表現は、サファイアが本質的に女性であるゆえに、彼女が「王子」として生きることを不本意に感じているという思いが込められていると考えられる。



画像③：『リボンの騎士』（完全復刻版・少女クラブ版）、第2巻110頁

さらに、物語の中盤に描かれる画像③の場面について考察してみよう。このシーンは、サファイアが最終的に「王子」として振る舞うことから解放され、「女性」として王位を継承できるようになった瞬間を描いている。サファイアが両性具有ではなく、むしろ完全なる「女性」であることを示す象徴的な場面である。「もうむりに男のなりをしなくてもよいのです」というナレーションが敢えて付されていることに注目したい。物語の舞台であるサファイア国では、王位継承者は男性でなければならないとされていたため、主人公サファイアは幼少期から「王子」として育てられ、国家の安定のために男子として振る舞うことを強いられてきたのはすでに述べたとおりである。しかし、ジュラルミン大公の息子プラスチックが「男子の心」を飲んだことで利発さを獲得し、「女性」であっても王位を継げるように法律を改正すると

いう事態が発生する。ここに至って、サファイアはようやく「女性としての自分」に戻ることが可能になったのだ。これは、サファイアが男性として振る舞う必要が消え、彼女が本来のアイデンティティに戻れる転機を得たことを意味する。彼女が両性具有的なキャラクターではなく、「元より女性として生きたかった」という本質が明らかにされる瞬間なのだ。「むりに男のなりをしなくてもよい」というナレーションは、サファイアにとっての「男のなり」とは、自分の意志で両性の特徴を併せ持っていたゆえの行動ではなく、王国の安定のために「王子」という役割を演じていただけであることを示唆する。彼女が男性として振る舞うのはあくまで外的な圧力のためであり、内面には一貫して「女性」としての自分自身が存在していたのである。

『リボンの騎士』という作品の解釈が、根本的に主人公が「男子の心」と「女子の心」を持っているという設定に強く依存してきたことは既述した通りである。ゆえにサファイアはあくまでも両性具有的、性別越境的存在と捉えられ、ジェンダーの固定的な二元論を超えた象徴として見なされたことにより、彼女の苦悩は内部的な葛藤、またはジェンダーの流動性による心の揺れ動きとして説明されてきたのである。しかし、両性の心を持つという設定があまりにも肥大化したゆえに、「なぜ彼女が男性として振る舞うのか？」いや、「振る舞わなければならないのか？」ということが過小評価されてきたのではないか。そして、最も問題視されるべきは、極めて単純に「両性具有的存在」という概念が『リボンの騎士』に当てはめられてしまっている点である。既述したように、ベムやシンガーをはじめとする研究者たちが提唱した概念による「両性具有的存在」の解釈とは、男性性と女性性が一つの存在の中に共存し、そのバランスが取れている状態を指す。要するに、「両性具有」とは、男性と女性の両方の特質を持ちながら、それらが完全に統合されているという意味合いが強いのである。両性の特質を保有しているという「設定」だけでは、両性具有的存在な人間を描き切るには不十分である。また、一つの存在が両性の役割をこなすという単純な問題でもない。あくまでも両性具有的に見えるだけではなく、両性の特質を持つこと、あるいは良性的役割を演じることで、本人自身が心理的にも精神的にも達成感や満足感を得る状況でなければならない。片方の特質を押し殺して、無理にもう片方の特質を演じることではない。両性具有的存在は、男性的特質と女性的特質の両方を自己の内に備え、状況に応じてそれらを柔軟に表現できることが特徴である。『リボンの騎士』において、サファイアが男性的に振る舞うのは、自身の選択や柔軟性ではなく、社会的・政治的な期待や義務に応じたものであり、これはベムやシンガーらが理想とする心理的両性具有とは異なる状態である。彼女の場合は、周囲の期待に沿う如く男性性を提示しつつ、同時にその外圧に抗いながらも女性性を保っているという点で、むしろ両性具有定存在とは対極に位置する存在であり、女性性という本来のアイデンティティをかりうじて死守する存在なのである。

『リボンの騎士』を語るとき、作品のタイトルにも使用されている「リボン」というワードに目を向けないわけにはいかないだろう。これはサファイアというキャラクターのジェンダー表象を理解する上で鍵となる象徴であり、作品の核心に迫るためにも欠かせない要素である。物語中、常にサファイアのトレードマークにもなっている「大きなリボン」は、この作品が漫画というビジュアル媒体であるからこそ、その効果を発揮することができる。岩下は、「大きなリボン」を単純に女

性性の象徴と見なすのではなく、「それを身につけている者がサファイアであることの目印としての指標的記号として」解釈するべきであると指摘する（岩下、『少女マンガの表現機構』, 107）。では、「指標的記号」とは何であろうか？サファイアが男子として振る舞っているときでも、彼女は「大きなリボン」を外すことはない。このことから、リボンは彼女の内面的な女性性を象徴し続けるということもあろうが、それだけでは極めて単純な読みにとどまる。「大きなリボン」にはもう一つの役割が生じていると考えなければならない。「リボン」とは装飾であると同時に、「結ぶ」という機能を持つ。作品におけるリボンの表象として、サファイアが男女どちらの役割を演じていても、彼女の本質が女性であるという事実を彼女自身の心にしっかりと結びつけ、統合している象徴と見ることができるのではないだろうか。よって、「大きなリボン」が示すところの意味は、リボンそのものが女性性を象徴しているというよりも、「結ぶ」というリボンの役割がサファイアの存在を安定させる象徴として機能しているのである。

それでは、作品中において、サファイアの女性性をどのように読み取れば良いのだろうか。彼女が両性具有的な存在ではないという分析に基づき、作品中で彼女が一貫して「女性」として描かれている点について論じていきたい。

b. サファイアの女性性と異性愛の強調

神戸啓太は、『リボンの騎士』を少女マンガにおける「戦う少女」の起源として位置づけ、サファイアを「両性具有」の一例として取り上げているが、その解釈を流動的なジェンダー概念と結びつけるには限界があると指摘する。たとえば、神戸はその一例として、「プラスチックの妃選び



画像④：『リボンの騎士』
（完全復刻版・少女クラブ版）、
第2巻44頁

の際、女性の姿のまま短剣を持ち込んで暗殺を試みる場面があるが、それが失敗に終わるうえ一人称が『あたし』であるように、サファイアの意見・意図に関わらず2つが共存することは極めて困難なものとして描かれる」（神戸, 107）と論じるが、サファイアの「男性的な振る舞い」が本質的に彼女の意志やアイデンティティとは無関係な外的な役割に過ぎないことは、フランツとの恋愛を通して考察するとさらに明らかになる。たとえば、画像④が示唆するように、サファイアが男装し、「王子」としての役割を果たしている状況にもかかわらず、フランツに対しては明らかに恋愛感情を抱いていることから、彼女の女性としてのアイデンティティは一貫して女性であることがわかる。サファイアの「男子」としてのふるまいと「女子」としての本質が常に統合されているわけではなく、むしろ外的な圧力によって「王子」として振る舞わざるを得ない場面が多い。引用の場面も、サファイアはフランツへの恋心という明確な女性的感情を抱き続け、彼女の女性性が揺るぎないものであることが象徴されている。サファイアの女性性を語る上で、フランツとの恋愛は重要なモチーフとなって



画像⑤：『リボンの騎士』
(完全復刻版・少女クラブ版)、
第1巻31頁

おり、作品における異性愛の強調に関連しても重要なテーマの一つとなる⁶。とりわけ、サファイアが一貫して女性であること、すなわち両性具有ではないことと、作品において異性愛が強調されていることについて考察する際、サファイアが「亜麻色の髪の乙女」に扮する場面は極めて興味深い。王子として生活することを余儀なくされているサファイアであったが、ある日、隣国の王子が復活祭にお忍びでサファイア国を訪問してくることになる。画像⑤の場面から読み取れるように、彼女は、舞踏会に参加することを切望するが、王子の立場では「姫」として舞踏会に顔を出すわけにはいかない。そこで、母である王妃の協力を得て、「亜麻色の髪の乙女」に変装して舞踏会に参加する。サファイアはド

レスを身にまとい、まさに「シンデレラ」のごとく舞踏会に現れ、隣国のフランツ王子と出会うのである。中野晴行は『リボンの騎士』におけるサファイアの「演じること」について、「王子として生きるサファイアが『亜麻色の髪の乙女』に変装することは、本来理想の男を演じるはずの男役が女を演じるということなのだ」と論じる（中野, 200）。サファイアは女性でありながら「男子」を演じ、その「男子」がさらに「女子」を演じるという複雑なジェンダー表象の構造が存在していると中野は分析していると考えられる。そして、この二重構造について、中野はジェンダーの役割が多層的に入れ替わることで、ジェンダーに対する固定観念を揺るがす効果が生まれているとも捉えている。しかし、この場面で重要なことは、「女→男→女」という二重構造の中で、サファイアは「男子を演じる」際には苦痛とも言える感情を抱いているにもかかわらず、「女子を演じる」際には何ら違和感を感じていないということだ。むしろ、愛するフランツとの関係においては、それは演じるのではなく、本来の自分自身を曝け出すことに他ならない。この二重構図は彼女のアイデンティティが揺るがないことを強調し、社会的に与えられた「男性役割」は外的に演じているに過ぎないことを示している。

この構図を両性具有や性別越境と見なすことには無理がある。サファイア自身に自発的に両方の性の特質を自由に行き来する意志や、ジェンダーに対する流動的な自己認識が全くないからである。見かけ上は、両性具有的や性別越境的に見えるかもしれないが、実際には、彼女が一貫して女性としてのアイデンティティを保っていることを逆説的に証明することになっているのだ。このため、「女→男→女」という二重構造において、かえって彼女が完全に女性であることを提示するというパラドクスが成り立っているといえよう。

一方、フランツの視点からサファイアはどのように映っているのだろうか？ フランツ王子は「亜麻色の髪の乙女」に扮したサファイアを完全に女性として認識し、純粋に心を寄せるようになる。この点も見逃すことはできないだろう。フランツの恋心は、サファイアの「王子」という社会的役割に惑わされることなく、彼女の本来の女性性に惹かれていることを示すものである。この構図から読み取れることは、サファイアが「女→男→女」を実行することによって、ジェンダーの多層性

⁶ 物語を通し、サファイアが同性愛者でないことは火を見るよりも明らかなことであろう。

や流動性を象徴しているのではなく、サファイアが一貫して「女性」としてのアイデンティティを保っているという事実に尽きるのである。フランツが彼女に対して抱く恋愛感情は、「男性」の仮面を超えて、サファイアが本質的に女性であることを浮き彫りにしているだけではなく、フランツ自身がその本質に気づかずに惹かれていることが、サファイアの女性性が「本物」であるということをさらに強調していると言えよう。物語の中で、サファイアが「王子」としての役割を演じるとき、フランツは彼女が「亜麻色の髪の乙女」であることを見破ってはいない。この状況を鑑みると、サファイアが男性性を発揮しているという意味で「両性具有的存在」に見えるかもしれないが、彼女は国家の事情によって「王子」として振る舞うことを余儀なくされているに過ぎないのであり、彼女自身の意思で男性的な役割を選んでいるわけではなく、むしろサファイア自身、フランツの前で男子として振る舞わなければならないことに苦痛と悲哀を感じている。この点を考慮すると、サファイアが男装していることは男性性の表現ではなく、外的圧力に従った行為であり、彼女の内面に男性性の実存しているとは言えないのであり、それどころか、「苦痛」や「悲哀」が彼女が女性であることを如実に物語っていると解釈できる。話しは全く反対で、彼女が「王子」を演じている間も異性愛的な恋愛を抱くという点は、サファイアのアイデンティティが常に女性に固定されていることを強調するのだ。サファイアが同性愛者ではなく、あくまで異性愛的な恋愛感情を持つことで、彼女の心と身体が一致していることが証明されていると考えられる。

『リボンの騎士』におけるフランツとサファイアの恋愛は、「異性愛の強調」としての役割が大きく、作品全体が提唱するセクシュアリティの単一化を示唆するものとしても機能している。たとえば、大幅に加筆された「なかよし版」のみに登場するエピソードであるが、物語の終盤、男装したサファイアに対し、事情を知らない隣国の王女フリーベが懸想し、危うく結婚式を挙げる段階にまで話が進むという場面がある。ギリギリのところでサファイアが、実は自分は女性であることを告白する。画像⑥は真実を知った神父によって語られる台詞である。神父のセリフから、この作品が、同性愛、すなわちセクシュアリティの多様性など論外であり、ただ異性愛のみを支持していることは明らかであろう。

作品が描かれた 1950 年代という時代にしてみればそれは当たり前のことであり、作品には当時の社会的な価値観やジェンダー観が反映されていると見てよからう。「女どうしの結婚」、すなわちセクシュアリティにおける多様性という考えなど全く許容されないのである。そして、物語の中で主張されるセクシュアリティの多様化の否定は、そのままジェンダーの多様化の否定にもつながると考えられるのではないだろうか。

1950 年代の日本は、戦後復興期にあたり、急速な発展とともに社会やメディアに保守的なジェンダー規範が根付いていた時代である。女性の役割は主に家庭内に限定され、異性愛が「当たり前」とされていた。そのような時代背景の中で異性愛が強調される描写は、むしろ当時のセクシュアリティ規範に適応している証拠と捉えられる。このため、サファイアが「王子」として振る



画像⑥：『リボンの騎士』
(なかよしオリジナル版・復刻
大全集)、BOX3-234 頁

舞っても、最終的に男性のフ란ツと結婚する結末が、当時の社会的期待に沿った形で描かれていると解釈できる。つまり、『リボンの騎士』は、セクシュアリティの視点において 1950 年代の日本社会の保守的な価値観が色濃く影響を受けているのだ。そのような影響下で、果たしてジェンダーだけが革新的に描かれるだろうか。多くの先行研究は、サファイアの存在を「両性具有」や「性別越境」と関連づけつつ、その表現の限界も指摘してきた。しかし、サファイアのジェンダー・アイデンティティが流動的で越境的であると解釈すると、この作品がセクシュアリティにおいて極めて保守的な見解を示しながら、ジェンダーにおいては革新的な姿勢を提示するという矛盾した状況に陥ってしまう。サファイアが両性具有的な存在ではなく、「完全な女性」とであると解釈してこそ、異性愛の主張にも合致し、1950 年代という時代の中で創作された物語が保守的なジェンダーとセクシュアリティの枠内で展開していると見ることができる。

本節では、サファイアの女性性と異性愛の強調に注目しつつ、彼女が両性具有的存在ではないことを論じてきた。では、多くの先行研究が拠り所としてきた、天使チンクがサファイアに「男子の心」と「女子の心」を付与してしまったという「イタズラ」をどのように解釈するべきであろうか。次節で考察を進めていく。

c. 「男子の心」と「女子の心」の象徴性

サファイアが一貫して女性であるという解釈をする際、彼女が生まれる前の天上界における天使チンクのイタズラにはどのような意味があるのかという疑問が発生する。下界の世俗的な事情にかかわらず、サファイアは生まれた時に、すでに男女の心を所有していたのであり、この設定ゆえに、彼女が「両性具有的存在」とであると解釈される基盤ともなっているからである。しかし、この疑問点は、天使チンクとサファイアの状況を正確に捉えることで解決に導くことができる。

チンクは、物語の冒頭、イタズラで「男子の心」と「女子の心」の両方をサファイアに与えてしまうが、これから下界に生まれゆく子供たちに性別の心を付与するのは神のなすべきことであり、チンクの本分ではない。つまり、チンクがサファイアに「男子の心」を与えたことは、本来の性別に対する不適切な干渉であり、サファイアが出生後に本来の性別に戻らなければならないということ

を示唆している。それを実現すべく、チンクはイタズラの後始末をつけるために、神によって下界に遣わされる。もし、サファイアが両性具有的な存在として生きるのが望ましいのであれば、チンクがサファイアから「男子の心」を取り除こうとする必要はない。チンクが「男子の心」を取り除こうとする行動自体が、サファイアが一貫して女性であり、男性としての振る舞いは外的圧力によるものであることを示すのではないだろうか。

一方、一時的にサファイアが悪魔によって「女子の心」を抜き取られた結果、自己認識が男子へと変化するというエピソードがある。画像⑦の場面は、サファイアの正体を



画像⑦：『リボンの騎士』
(完全復刻版・少女クラブ版)、第 3
巻 20 頁

見破りかけるフ란ツ王子に自分は男子であることを誇示するために、サファイアはドレスを引き裂いて見せるのである⁷。このエピソードは、一見したところ、やはりサファイアは性の揺らぎを経験し、それが性別越境的な印象を与えるようにも見えるが、ストーリーを注意深く追跡すると、彼女自身が保有する内面の揺らぎではないことがわかる。サファイアはなぜ「女子の心」を失ったのか、ということが考察の鍵になる。それを奪い取ったのは魔王メフィストであり（「なかよし版」では、魔女ヘル夫人による）、いわばサファイアの男性的な自己認識は、悪魔の力で「女子の心」を抜き取られたことによる一時的な外的影響に過ぎない。つまり、これはサファイアの内面やアイデンティティが自発的に「男性」に変化したわけではなく、魔法の力で引き起こされた一時的な自己認識の攪乱と見ることができるのである。つまり、彼女の本質的なジェンダー・アイデンティティは変わっていないと解釈できる。この場面を、サファイアが本来は女性であることの証明として捉えることは可能である。上述したように、彼女が一時的に男子として振る舞うのは、あくまで外的な力による「攪乱」に過ぎない。「魔法」であれば、いつかはとけるものである。むしろ、「女子の心」を取り戻すことで本来の自分に返ることが示唆され、彼女の一貫した女性性を再確認するための展開と捉えることが可能となる。

注目すべきは、下界においてサファイアが男子の役割を担わなければならない背景と同様に、男女の心の保有も、女子の心を抜き取られた背景も、彼女自身の内的な選択や自然な特性によるものではなく、常に外的な要因によって強制されたものであるということだ。天使チンクのイタズラによって「男子の心」がサファイアに加わったのは、彼女自身の内的な意思や性質とは全く無関係な偶然の出来事に過ぎない。この設定は、サファイアが両性の特質を意図的に備えているわけではなく、外的な力により一方的に押しつけられたものと理解できる。このため、サファイアは心理的両性具有的な存在ではなく、むしろ予期しない状況に翻弄されるキャラクターであると言える。物語の途中で魔王メフィストが「女子の心」を奪う場面においても、サファイアは自身の内面的な意思とは無関係に、強制的に「男子の心」だけで行動せざるを得ない状況に追い込まれている。ここでも、彼女のジェンダー表象は外的な力によって左右されているに過ぎず、彼女の内面的な選択や自己の統合とは異なるものとして描かれている。このように、サファイアが「男子の心」と「女子の心」の間で揺れ動くのは、自発的なものではなく、あくまで外部の操作によって引き起こされた一時的な混乱であると言える。したがって、サファイアの「男女の心」は彼女自身の心理的両性具有的な表れではなく、外的な干渉によってもたらされたものであり、彼女が本質的には一貫して「女性」としてのアイデンティティを保ち続けていることは明白である。この点において、サファイアは心理的両性具有的な存在ではなく、むしろ外的な力によって翻弄されるキャラクターとして理解されるべきである。

天使チンクによる「男女の心」の付与は、サファイアを両性具有的な存在に仕立てるための設定

⁷ この場面は、版によって若干の相違がある。本論において引用した場面は『リボンの騎士』（完全復刻版・少女クラブ版）からである。その他、『リボンの騎士』（手塚治虫漫画全集 86・少女クラブ版）第2巻では、サファイアは「何をいうのだい、ぼくは生まれたときから男だよ」（91頁）と言いながらドレスを引き裂き、『リボンの騎士』（なかよしオリジナル版・復刻大全集）BOX 2では、「もう一度でもくりかえしてみろ、ただではおかないぞっ」（139頁）と述べるだけでドレスを引き裂く行為はない。

よりも、むしろ彼女が完全なる女性であることを際立たせるメタファーとなっている。物語全体を通じて、サファイアは「王子」としての役割を果たしつつも、内面では一貫して自らを「女性」として認識している。チンクが「男子の心」を取り除こうとする行動は、サファイアが外的な圧力から解放され、最終的に「完全に女性」であることが運命づけられていることを暗示している。チンクの存在は、サファイアを両性具有や性別越境の象徴として描くための装置ではなく、むしろ最終的には彼女が完全に「女性」としての自己に回帰することを象徴し、その女性性を際立たせる装置として機能しているのである。

4. 何がジェンダーを越境したのか？

『リボンの騎士』において、性の多様性や流動性を否定するにしても肯定するにしても、結果的に当該作品は性別二元論の概念を再確認しているだけではないかという疑問が残る。作品が描かれた 1950 年代という時代、日本社会は伝統的なジェンダー役割が強く再確立されていた時代であり、男性は「家父長」であり、女性は補助的な役割が強調される時代であった。この状況において、ジェンダーの固定的な役割が作品に反映されることは自然であり、あえてその「再確認」を指摘すること自体が現代の読者にとって新たな洞察を提供するものでもない。主人公のジェンダー・アイデンティティだけに注目しすぎると、結局、『リボンの騎士』という作品が社会に与えるメッセージは何なのか、ということに帰結してしまうのである。「両性具有」や「性別越境」を通じて、単に性別二元論を批判するだけでは、『リボンの騎士』の本質的な価値を見逃す可能性があり、もっと他の建設的なアプローチが必要と考える。本作品が提示するテーマは、単なる性の多様性にとどまらず、もっと根源的な人間の在り方に結びついているのではないだろうか。この観点から、本節では作品の核心に迫り、サファイアが体现する価値についてさらに考察を進めていきたい。

a. 何ゆえの「サファイア」か？

作品誕生の背景について、手塚治虫本人が後に、「昭和 27 年の秋に、当時「少女クラブ」の編集者だった牧野さんが来られて、『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』のようなストーリー漫画を、少女ものとして作れないだろうかと、相談をもちかけられたのです・・・ほくは・・・やってみましょう、とご返事しました」（手塚、『リボンの騎士』[手塚治虫漫画全集 86・少女クラブ版] 第 2 巻「あとがき」, 188）と語っている。『鉄腕アトム』は『リボンの騎士』よりも約 9 ヶ月前に発表された手塚の代表作である。この作品では、主人公アトムはロボットでありながら、人間と同じような感情を持つ存在として描かれている。『鉄腕アトム』とは、主人公が人間とロボットという二つの世界の境界を越えた存在として「正義」を追求する物語と言える。『ジャングル大帝』は『鉄腕アトム』よりもさらに半約年前に発表された作品であるが、そこでは自然界の調和や生命の尊厳、異なる種族や価値観の共存といった観点から「正義」が描かれている。全てとは言えないまでも、『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』に代表されるように、多くの手塚作品において「正義」は重要なテーマとなっているが、『リボンの騎士』もまた、そうした手塚作品の流れを汲むもので

あり、その再評価においても「正義」が鍵となるのではないだろうか。サファイアが困難に立ち向かい、善を行おうとする姿は、「正義感」が、さらに他者への配慮や国を守る意識においては「責任感」が象徴されている。『リボンの騎士』を再評価する際には、単にジェンダーの境界を越えるというストーリーに注目するだけでなく、作品が内包する「正義感」と「責任感」の視点を見出すことが重要だと考える。

彼女は、表面上は男性と女性という二つの社会的・性別的な役割の間で生きているが、前節で論じたように、彼女自身は実際には一貫した女性であり続けている。この点で、サファイアを「両性具有」や「性別越境」として解釈するのは単純過ぎるというのはすでに述べた。むしろ、完全なる女性でありながら、男性を演じるという「両義性」を抱えながらも正義を実行する人物と捉えるほうが妥当である。この両義性に注目することで、手塚が描く人間らしさや正義とは、性別や身体の制約を超えて、普遍的な倫理的行動をもたらすというテーマが浮き彫りになるのだ。アトムがロボットとしての限界を持ちながらも、人間的な正義を貫くように、サファイアもまた、性別の枠に関わらず、人間としての正義を実現しようとする。

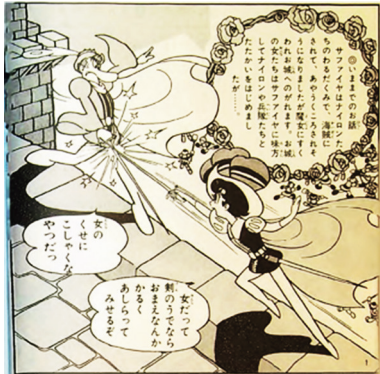


画像⑧：『リボンの騎士』

(完全復刻版・少女クラブ版)、第1巻85頁

では、サファイアが正義感や責任感に溢れる主人公として、作品中ではどのように描かれているのであろうか？ まずは、画像⑧の場面について、佐伯順子の指摘を踏まえながら、考察してみよう。この場面について、佐伯論文では、次のように論じられている：「だが、『リボンの騎士』の面白さは、サファイアの男装が強制的で受動的なものにとどまらない点である。棺桶塔から何とか抜け出したサファイアは、仮面

をつけた『リボンの騎士』として世間に再び姿を現し、『弱いものいじめ』をするナイロン卿をやっつける。『私はリボンの騎士 さア 相手に なるぞっ』と勇ましく剣を抜くサファイアは、もはや、無理やり男装させられた嘆きの少女ではなく、主体的に行動をおこし、自ら状況を変化させる強い能動性を備えた人物へと変貌している。幽閉という試練を乗り越えた、ヒロインの精神的成長が、『リボンの騎士』の姿には見てとれる」（佐伯, 125）。佐伯は、この過程を通じてサファイアが「強い能動性を持つ人物へと変貌する」と述べるが、要は、何がサファイアに「能動的な行為」を起こさせたのかということである。物語の基本的な筋立てである、「王位継承」と「国家の安全維持」に注目した場合、サファイアを動かす根本的な動機は、ジェンダーや男装そのものではなく、彼女の内面的な正義感や責任感に他ならない。つまり、彼女は社会的事情のために男性の役割を演じざるを得ない状況に置かれてはいるものの、その行動の源は倫理的判断にあるのだ。サファイアがナイロン卿を倒す場面においても、彼女が選んだ行動は、自らの正義感に基づくものであり、男装はそのための手段に過ぎないという見方が可能となる。多くの先行研究では、『リボンの騎士』における「男装」の解釈において、女性が男装することで社会的・文化的に男性にしか許されない



画像⑨：『リボンの騎士』
(なかよしオリジナル版・復刻大全
集)、BOX3-20 頁

はもはや、彼女は男子としての振る舞いから剣を駆使しているのではなく、女性のままに悪者ナイロン卿をやっつけようとする。この戦いにおいて、彼女をして勇ましく行動させているのは、ジェンダーを超えたところにある正義と責任の二文字であることが読み取れるのである。「少女クラブ版」でも「なかよし版」でも、物語全体を通じて、サファイアは何度も不正に立ち向かい、正義を追求する姿勢を示す。彼女の勇気や行動力は、男性性に依存しているのではなく、人間として持つべき普遍的な正義感、それを実行するための責任感が行動の原動力になっていると解釈できる。サファイアにとって、「男子」としての役割を演じようが、「女子」としての役割を演じようが、彼女の根底にある普遍的な価値はジェンダーによって左右されるものではない。すなわち、『リボンの騎士』における「両性具有」や「性別越境」は、サファイア自身が両方の性別を具有したり、越境したりするのではなく、人間としての普遍的な価値が性別を超えて存在することを示している。サファイアに「男子の心」と「女子の心」を与える設定によって、ジェンダーに依存しない人間の本质が強調されているのである。

手塚治虫が『リボンの騎士』で性別越境や両性具有を意識的に描いたのではなく、少女たちに正義感や責任感を果たす上での「勇気」を提示したかったと解釈するほうが、当時の社会背景にも合致する。サファイアのキャラクター設定は、現代のジェンダー論から再解釈されがちであるが、手塚の意図はむしろ、ジェンダーを超えた人間としての倫理観にあったのではないだろうか。

b. サブキャラクターたちの役割

作品の大きなテーマが正義の追求であるということは、サファイアだけでなくサブキャラクターたちに目を向けたときに、そのテーマの存在感がより明確に浮かび上がる。とりわけ、ヘケート、ビーナス、海賊ブラッドらのサブキャラクターは、サファイアとは異なる形でジェンダーと正義についての問題を反映し、物語に新たな解釈を提供することに一役買っている。

サファイアは物語の主人公として常に一貫した正義の体现者として描かれるが、サブキャラクターたちは物語のテーマやメッセージを強調するために、各版で微妙に異なる役割を与えられてい



画像⑩：『リボンの騎士』
(なかよしオリジナル版・復刻
大全集)、BOX2-170 頁

る。ときには、サブキャラクターたちの描写こそが、作品のメッセージを際立たせる要素として機能することもあるのだ。その一例として、ヘケートについて考察していきたい。

ヘケートは「少女クラブ版」にも「なかよし版」にも登場するキャラクターであるが、描かれ方は大きく異なっている。彼女は悪魔の娘であり⁸、男まさりの荒っぽい少女として描かれている。そのため、親はヘケートに女性らしさを植え付けようと、サファイアの「女子の心」を手に入れようと画策するが、本人のヘケート自身は「女性らしさ」など欲してはいない。「少女クラブ版」では、ヘケートはジェンダーに強く結びついた役割が描かれている。彼女は、サファイアの心を得ることで正義感や優しさを表現するようになる。この描写は、女性性が優しさや思いやりと結びつけられるという伝統的な考え方が反映されているように見えるが、ヘケートに「心」を入れた後の

魔王メフィストのセリフをよく読むと、ヘケートに宿ったのは、「サファイアの女子の心」ではなく、「サファイアのやさしい心がやどったのじゃ」と、わざわざ「やさしい心」という表現が使われている。つまり、「女子の心」＝「善」ではなく、「サファイアの女子の心」＝「善」なのである。一方、「なかよし版」では、ヘケートを通してジェンダーと正義は必ずしも関係しないという視点がより進化して描かれており、善悪の基準がジェンダーに依存しないことが一層強調されている。画像⑩では、ヘル夫人によって盗まれた心をサファイアに返そうとするヘケートの姿が描かれている。ヘケートは「女子の心」を飲んでいないにも関わらず、フランツ王子への恋心を抱くようになり、同時に、持ち主としてのサファイアの権利を尊重し、「心」を返還しようとするのだ。この描写により、「なかよし版」ではヘケートを通じ、ジェンダーによる固定的な役割を超えた普遍的な正義感が表現されていることが際立っている。サファイアの行動と同様、ヘケートもまた正義がジェンダーに依存しない普遍的な価値であることを体現している。このように、ヘケートの行動がサファイアの行動と共鳴することで、倫理観がジェンダーを超えて人間としての普遍的な価値であるというテーマが一層浮き彫りとなるのである。

物語における「善」はジェンダーに依存せず、あくまで個々の選択によって示されるものであり、すなわちジェンダーと正義は必ずしも関係しないという視点は、「なかよし版」においてさらに鮮明に描かれている。その象徴として、「なかよし版」にのみ登場するビーナスと海賊ブラッドの存在が大きな役割を果たす。女神ビーナスは、女性の代表とも言える存在であり、女性らしさや美しさを象徴しながらも、作品においては悪役として登場する。自己中心的な行動によって最終的には豚に変えられるという罰を受ける。この描写は、単に女性であることが「善」と結びつくわけではないことを物語ると同時に、外見や性別にかかわらず、善悪の基準は普遍的であるというメッ

⁸ 「少女クラブ版」では、ヘケートは父親に魔王フェミスト博士を持つ存在として、「なかよし版」では母親に魔女ヘル夫人を持つ存在として登場するが、いずれにしろ、悪役の悪魔の娘であることには変わりはない。

セージをより強く印象づけている。ビーナスの役割が、ヘケートの選択やサファイアの行動と対比されることで、「女性性＝善」という固定観念が崩れ去り、物語が示す倫理観がジェンダーを超えて普遍的であることが明確になるのである。さらに、このことを「異なる側面」から補強するのは海賊ブラッドの役目である。ブラッドは実はフランツ王子の実兄であるが、王族の身分を捨てて海賊船の船長として生きている。彼は、勇敢で反抗的、換言するなら「典型的な男性性」を体現する人物だ。彼は自由を追い求め、規律に従うことを拒み、力強さと反抗心を持つキャラクターとして描かれる。ブラッドは、はじめは「海賊」として自由や力を追い求めていたが、物語が進むにつれて、正義感を取り戻し、サファイアのために奔走することになる。物語の後半でブラッドが「正義の人」として認識されることは、彼が単なる「男性的な強さ」や「自由」を象徴する存在ではなく、サファイアと同様に人間としての普遍的な価値、つまり正義感や責任感を体現するキャラクターであることを示す。ビーナスとブラッドは全く異なる役回りとして登場するが、実は、作品が示す重要なテーマを象徴するという意味において、同様の役回りを演じている。二人の対照的なキャラクターを通して、手塚治虫は正義の本質に関する多面的な視点を提示していると解釈できる。

「少女クラブ版」と「なかよし版」の両方で物語の中核になるテーマは「正義」にあるが、前者では、サファイアが王位（正義）を守るために「男性としての振る舞い」を強いられる外的状況が強調され、性別二元論に基づく葛藤が目立つ。一方、「なかよし版」では、ジェンダーに依存しない「人間としての正義感と責任感」が物語の中心に据えられ、普遍的な価値としての正義がより鮮明に描かれている。さらに、登場するサブキャラクターたちはサファイアの人間性や正義感を補完する存在として描かれ、ジェンダー役割に縛られない価値観が彼らを通して物語全体に反映されているのである。

5. 終わりに～ジェンダーを超えて生きることへのメッセージ

漫画は「大衆文化」として、子どもへの影響はもちろん、社会全体に及ぼす影響も少なくない。特に、「ジェンダー」に関する概念は、その表現やテーマを通じて、既存の価値観を反映するだけでなく、それを再確認し、再生産する役割を果たすことがある。これにより、古いジェンダー規範が強化され、新しい価値観や柔軟な視点が広がりにくくなるという問題も生じ得る。だからこそ、ジェンダーを主題に含む漫画作品を再解釈することは、固定化された規範を問い直し、新たな視点を提示する重要な契機となりうる。

では、『リボンの騎士』はどのような影響力を持つ作品なのであろうか。本論で述べてきたように、この作品には、これまでの研究では明確に意識されてこなかった「ジェンダーに依存しない人間存在の意義」を再解釈すべきメッセージが内包されている。そのメッセージとは、性別や社会的規範に縛られない生き方を尊重すること、多様な性のあり方に対する理解と寛容さである。サファイアは身体も心も完全に女性でありながら、外的な状況によって男性として生きることを強いられている。この構造を現代の視点で捉えれば、「個人が性自認とは異なる性による振る舞いを強制さ

れる」という点で、トランスジェンダー的な状況を想起させる側面がある。しかし、既に述べたように、1950年代の日本において、トランスジェンダーという概念が十分に理解されていたとは言いがたく、手塚治虫が当時、性の多様性を意図的に描いたとは考えにくいだろう。また、この作品をトランスジェンダーに関する議論の一端として捉える際、現代における学術的議論を補足することもある必要だろう。トランスジェンダーに関する現在の議論では、ジェンダーの社会的構築性、身体性と性自認の関係、さらには「ジェンダー・ディスフォリア」や社会的ジェンダー規範との摩擦などが重要なテーマとなっている。『リボンの騎士』におけるサファイアの葛藤は、こうした議論における「ジェンダー役割の強制と自己認識のズレ」というテーマと接続可能である。ただし、この視点は断定的に述べるべきではなく、新たな問題提起として提示することに意義があるだろう。

しかしながら、ここで重要なのは、この作品が時代背景を超え、結果的に「トランスジェンダーの状況」と重なる構造を描き出している点にあるということだ。この視点から読み解くと、サファイアを「両性具有的存在」や「性別越境的存在」として解釈する従来の枠組みでは十分ではなく、彼女が望まぬ「男性の役割」を強制される中で、女性としての性自認をどのように保とうとしたかを描いた作品として再解釈できる。この解釈こそが、サファイアが自己の信念と正義を貫く姿勢を通じて、性別や社会的規範にとらわれない生き方の重要性を提示している点を明らかにするのである。

最終的に、『リボンの騎士』が読者に伝えるメッセージは、「ジェンダーに依存しない人間存在の価値」の再認識である。ジェンダー規範が本質的に不必要な制約であり、人間としての存在は性別によって制限されるべきではないという考え方が、この作品を通じて暗示されている。サファイアの物語は、性別を超えた個人の尊厳と自由、そして多様な価値観への寛容さを示している。1950年代という保守的な社会的背景の中で描かれたこの作品が、現代の視点から新たな議論を生み出す可能性を秘めている点は注目に値する。このように、『リボンの騎士』は、性別を超えた生き方への問いを投げかけるとともに、一人ひとりが自身のあり方を尊重される社会の必要性を、時代を超えて我々に語りかけているのではないだろうか。

引用文献・参考文献

第一次資料

- 手塚治虫、『リボンの騎士』[手塚治虫漫画全集 85・少女クラブ版] 第1巻・講談社, 1979.
手塚治虫、『リボンの騎士』[手塚治虫漫画全集 86・少女クラブ版] 第2巻・講談社, 1979.
手塚治虫、『リボンの騎士』[完全復刻版・少女クラブ版] スペシャル BOX. 講談社, 2009.
手塚治虫、『リボンの騎士』[なかよし オリジナル版・復刻大全集]. 復刊ドットコム, 2016.

第二次資料

- 岩下朋世,「手塚治虫『リボンの騎士』における「性別越境」の両義性」, 日本マンガ学会『マンガ研究』vol.9, 2006.
pp.6-23.
-----,『少女マンガの表現機構～ひらかれたマンガ表現史と「手塚治虫」』NTT 出版, 2013.

- Ogi, Fusami. "Gender Insubordination in Japanese Comics (Manga) for Girls." in Lent, John A. (ed.) ILLUSTRATING ASIA, Honolulu: University of Hawaii Press, 2001. pp.171-186.
- 大城房美. 「『ジェンダー』がまだ『怪物』だったころ: 『魔法使いサリー』と『リボンの騎士』の時代」 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部『国際文化研究所 論叢』第16号, 2005. pp.23-40.
- , 「第6章: <越境する>少女マンガとジェンダー」, 大城房美・一木順・本浜秀彦編『マンガは越境する』世界思想者, 2010. pp.11-134.
- 沖光生. 『鉄腕アトム大事典』晶文社, 1996.
- 押山美知子. 「手塚治虫『リボンの騎士』論—<男装の少女>の誕生」の日本マンガ学会『マンガ研究』vol.2, 2002. pp.20-38.
- , 『少女マンガのジェンダー表象論—<男装の少女>の造形とアイデンティティ』彩流社, 2007.
- 河合隼雄. 『河合隼雄著作集 10 ～日本社会とジェンダー』岩波書店, 1994.
- 神戸啓太. 「手塚治虫『リボンの騎士』における「戦う少女」の表象～どう時代の社会的・文化的背景を視座として—」日本マンガ学会『マンガ研究』vol.29, 2023. pp.93-118.
- 佐伯順子. 『「女装と男装」の文化史』講談社, 2009.
- シンガー、ジューン. 『男女両性具有Ⅰ～性意識の新しい理論を求めて』藤瀬恭子訳. 人文書院, 1981.
- , 『男女両性具有Ⅱ～性意識の新しい理論を求めて』藤瀬恭子訳. 人文書院, 1982.
- 仙台市市民局市民生活部婦人青少年課. 『リボンの騎士の冒険～現代マンガ論・漫画を通してみる性の揺らぎ』（対談: 渡辺恒夫・藤本由香里）平成2年度女性フォーラム報告書（女性フォーラムⅦ）, 1991.
- 竹内オサム. 『手塚治虫論』平凡社, 1992.
- 竹内オサム監修. 『マンガ・アニメ文献目録』日本アソシエーツ, 2014.
- 谷口秀子. 「少女漫画における男装: ジェンダーの視点から」九州大学大学院言語文化研究院『言語文化論究』15, 2002. pp.105-114.
- 手塚治虫. 『手塚治虫とっておきの話』新日本出版社, 1990.
- 手塚治虫. 『漫画少年版 ジャングル大帝 豪華限定盤』小学館, 2009.
- 手塚プロダクション監修. 『手塚治虫キャラクター図鑑 4 ～「リボンの騎士」と夢の王国・ファンタジー編』朝日新聞社, 1998.
- 中川裕美. 「女性像から見た二つの『リボンの騎士』」ビランジ 20, 2007. pp.4-17.
- 中野晴行. 『手塚治虫のタカラヅカ』筑摩書房, 1994.
- 藤本由香里. 『私の居場所はどこにあるの? ～少女マンガが映す心のかたち』朝日出版新聞社, 2008.
- マッカーシー、ヘレン. 『手塚治虫の芸術』小巻靖子・有枝春訳. ゆまに書房, 2014.
- 三井宏隆. 「心理的両性具有とは何かー Bem, S.L. の考え方とアプローチを中心に—」日本グループ・ダイナミックス学会『実験社会心理学研究』第28巻 第2号, 1989. pp.163-169.
- 村上知彦. 「戦う少女の原像」, 齊藤環他『少女たちの戦歴—『リボンの騎士』から『少女革命ウテナ』まで』青弓社, 1998. pp.104-113.

The Secret of “Gender Transgression” Represented in *Princess Knight*: What Does It Mean to Be a Human Beyond Gender?

ISHIDA Yoriko

This study reconsiders the gender representation of Sapphire, the protagonist in Osamu Tezuka’s iconic work *Princess Knight*. The story presents Sapphire as unique in possessing a male heart and a female heart, thus positioning her as an individual who navigates dual gender roles as she fulfills her duties as heir to the kingdom. Consequently, many researchers have interpreted Sapphire as an androgynous or gender-transcending figure. Within the narrative, Sapphire’s androgynous depiction and her oscillation between masculine and feminine appearances have been viewed as emblematic of behavior unrestricted by conventional gender norms, thus establishing *Princess Knight* as a relevant subject for modern gender theory. However, through a detailed analysis of the narrative, the author argues that Sapphire is neither truly androgynous nor fundamentally gender-transcending, rather, she is consistently portrayed as female. The aim of this study is to reinterpret *Princess Knight* from a perspective that is distinct from those of traditional analyses, thereby elucidating the social and ethical messages concerning gender and its boundaries embedded in the story.